

ケアの倫理によるコミュニケーション行為における 「聴くこと」の捉え直し

—学校における生活指導への示唆—

増田 美奈

Reconsidering “listening” in communicative action by a
conception of the ethic of care
: Implication for school life guidance

Mina MASUDA

E-mail : mmasuda@edu.u-toyama.ac.jp

摘 要

本稿では、子どもたちの生活指導におけるケアと相互依存の関係性構築のための具体について示唆を得るべく、N.ノディングズのケアの倫理の非対称性概念からコミュニケーション行為における「聴くこと」の意義を析出した論考を検討した。検討を通して、①コミュニケーションにおいて聴くことがもつ積極的な意味を認識すること、②学校での生活指導の主たる場である学級活動を中心とした特別活動領域で、子どもたちの聴き合う関係づくりを中心に指導を行うこと、③生活指導における聴き合う関係づくりが、授業を対話的で応答的な学びの場にするためにも必要とされることが示唆された。

キーワード：ケアの倫理, 非対称性, コミュニケーション行為, 聴くこと, 生活指導, N.ノディングズ

keywords : the ethic of care, asymmetry, communicative action, listening, school life guidance, N.Noddings

I はじめに

1960年代から学校における子どもたちの生活指導¹⁾、学級集団づくりについての研究を牽引してきた竹内常一は、2015年、これからの学校における生活指導では「ケア的なアプローチ」が重要であると述べた [竹内 2015]。教師たちの生活指導実践報告のなかで、本来教師の実践に埋め込まれていた「ケア」の側面に関する報告が徐々に増加していることを指摘しつつ、その直接の契機は、傷つきやすさと生きづらさを抱えた子どもが顕在化してきたこと、さらに、学級社会を下支えしていたケアと相互依存の関係が解体してきたことにあると説明している [竹内 2015 : 83]。生活指導における「ケア的なアプローチ」について、彼は次のように述べる。「ケア的なアプローチは、傷つきやすい一人ひとりの子どもを当人の個別的・具体的な生活文脈に即して配慮することから始まる。それを通して子どもたちのなかにケアと相互依存の関係性を編み直し、脆弱で不安定な存在である子どもを排除するのではな

くて、共生することができる社会的な関係性をつくることを課題としている」 [竹内 2015 : 83]。竹内にとどまらず、学校での生活指導や学級集団づくりにおいて、教師と子ども、子どもと子ども間のケアの関係の構築の必要性を指摘する研究は数多く存在する [Noddings 1992, 佐藤 1995, 志水 2014, etc.]。では、子どもたちの生活指導において、子どもたちのなかにケアと相互依存の関係性を構築することは、具体的に何を重視することなのだろうか。幾重にも重視しなければならないことがあると考えられるが、本稿ではなかでも、「ケアの倫理²⁾」の概念からコミュニケーション行為における「聴くこと」の捉え直しを検討した議論に着目することで、示唆を得たい。以下、まず、N.ノディングズの提唱したケアの倫理について概観し(Ⅱ)、次に、ノディングズのケアの倫理を特徴づける非対称性の概念について確認する(Ⅲ)。そして、ノディングズの非対称性の概念を援用しつつ、コミュニケーション行為における聴くことの重要性を導き出したP.シュバイカートの論考を検討し(Ⅳ)、学校での子

どもたちの生活指導について示唆されることを述べることとする(V)。

II ノディングズの「ケアの倫理」

1. オルタナティヴな倫理学として

ノディングズは、ケアの倫理を提出した主著のなかで、「諸原理とそこから論理的に導き出されるものを確立することが中心だった」従来の倫理学に対して異を唱えることから、彼女の議論を始めている[Noddings 1984: 1]。倫理的な論証は「幾何学に特有の論理的な必然性に支配されているかのように」しばしば進められており、そのことに対して次のような言葉で指摘する。

倫理学は主に父の言語 (the language of the father) で、つまり原理や命題という形で、正当化や公正さや正義といった用語で議論されてきたといってもよい。母の声 (the mother's voice) は黙したままであった。[Noddings 1984: 1]

彼女は原理原則に基づく倫理学をむしろ「曖昧で不安定なもの」として拒否し、代わりに人の「感じることや必要、印象、パーソナルな理想の感覚 (a sense of personal ideal)」に依ったオルタナティヴな倫理学の確立を目指した [Noddings 1984: 3, 5]。

「受容力や関わり合い、敏感に応答すること」に根ざす、「道徳的推論³⁾からではなく道徳的な態度や善さへの切望に出発点をおく」立場から、「人間らしい情感のこもった応答こそが、倫理的行動の生まれ出る源である」ことを見つめていく [Noddings 1984: 2, 3]。

私の注目の焦点は、いかにして他者と道徳的にふれあうか (how to meet the other morally) という点にある。[Noddings 1984: 4]

ノディングズにとって、ある行為が正しいか否かはその行為が何らかの普遍的な原理原則に適しているかではなく、「いかに忠実にケアリング⁴⁾に根ざしているか」によって決まるという [Noddings 1984: 53]。

こうした倫理学へのアプローチの仕方は女性的な

アプローチといえとノディングズは説明する。自身の主張は、「女性的観点からの実践的な倫理学に関する議論」[Noddings 1984: 3] であると述べており、ケアリングに関する具体的な記述の多くにマザリング (母親業) を使用しているが、しかし、ここで「女性的」というのは女性に固有のアプローチではなく、これまでの歴史的社会的状況の中で男性よりは女性に培われてきたという意味で用いられているにすぎない⁵⁾。「すべての女性がそれを受け入れるだろうとか、男性が拒否するだろうとかいう意味ではない」のである [Noddings 1984: 2]。

彼女は自身が目指すものを、「私たち一人ひとりのなかで、これまで男性的なものと女性的なものを分け隔ててきた断絶がいかに大きいかを示し、道徳的な問題において、男性的なものと女性的なものと究極的な超越に到達するために、真に弁証法的な性質をもった対話へ参加するよう示唆することをねらいとしている」という言葉で表している [Noddings 1984: 6]。

ノディングズはケアの倫理の確立を通して、「すべての人にとって自然で、受け容れられる形のケアリングがあることを主張したい」と述べるが [Noddings 1984: 27-28]、その際、ケアの倫理を当為の倫理として定義し、体系化してはいない。

本書がねらいとしているのは、ケアリングの規準の体系的な詳述ではない。むしろ、私はそうした体系的な努力は、これが体系を目標とするものである限り誤っていることを示さねばならない。私たちは、何が実りあるものであるかを示すために同じくらい、何が実りないものであるかを示すために努力を払う。私のねらいは、諸処の事例を分類して、Aはケアしているとか、Bはケアしていないとか、CはケアしているがDに対してはそうではないとか、判断を下せるようになることではない。もし、ケアリングがどんなに錯綜した複雑なものであるか、実際、どんなに主観的なものであるかを理解できるならば、そこから時には誘発される葛藤や苦悩に出会う覚悟をしておいたほうがよいかもしれない。そうすると、また私たちは様々な種類の世話 (caretaking) に何十億ドルもつぎ込んでいる国で、「誰もかまってくれない (Nobody cares)」という不満が至る所で聞かれるのはい

かなることか、少なくとも部分的には理解できるようになるかもしれない。[Noddings 1984 : 11-12]

ノディングズが提起したケアの倫理は、では、いかなる全体像なのか。次に概観したい。

2. 自己と他者のケアリング関係の生成

ノディングズのケアの倫理の大きな特徴の一つは、ケアリングを徹底して自己と他者の関係の生成として考察していることである。

彼女は「ケアリング関係 (caring relation)」を、「ケアする人 (the one-caring)」と「ケアされる人 (the cared-for)」の二つの視点から捉えている。ノディングズは、ケアリング関係は、ケアする人の側の「専心没頭 (engrossment)」や「動機づけの転移 (motivational displacement)」⁶⁾と、ケアされる人の認知 (recognition) や応答 (response) の双方を通して生成されると見る [Noddings 1984 : 78]。

ケアする人は、「ケアされる人に耳を傾け、彼の物語ることに喜びや苦しみを感じようとして、満足のいくまで『専心没頭』する。『専心没頭』は熱烈である必要はないし、ケアする人の生活にみなぎっている必要もないが、それが生じなくてはならない」と彼女は述べる [Noddings 1984 : 17]。

こうした「専心没頭」のなかで起きるケアリングの本質的な要素に、「動機づけの転移」という現象を見出している。「動機づけの転移」とは、「他者と、その他者がめがけようとしているもの (the project) への私のエネルギーのシフト」である [Noddings 1984 : 49]。つまり、私の、ケアされる人をケアしたいという動機づけのエネルギーを、ケアされる人がめがけようとしているものへ共有するように転移させるのである。

一方、ケアする人とケアされる人が「同等ではなくふれあっている (unequal meeting)」ケアリング関係のなかで、ケアされる人はケアする人のそれらのケアリングの行為に気づき、ケアする人を受け容れ、応答する。ノディングズは、ケアされる人のこの受容的な応答をケアリング関係の生成におけるもう一方の本質的な要素と見なし、ケアする人とケアされる人の「互惠性 (reciprocity)」のなかで初めて、ケアリング関係が成立すると述べた。

ケアする人が「他者に付き添い応答し、ケアされる人がそれを受け容れたことを示す」、「心の自然な傾向から」生じる関係を、ノディングズは「自然なケアリング (natural caring)」と呼ぶ [Noddings 1984 : 5, Noddings 1995 : 137]。それに対して、「自然なケアリング」が成立しにくい状況では、ケアする人はケアする態度を維持しようとする「倫理的な理想 (ethical ideal)」に依った態度や行動を示す場合がある。それを彼女は「倫理的なケアリング (ethical caring)」と呼ぶ [Noddings 1984 : 79-103]。

「倫理的な理想」というのは、自己の外側にある理想的なものではなく、「善いと感じる自己や関係としての、一連のケアしケアされた記憶」、つまり自然なケアリングから生じる [Noddings 1995 : 137]。それは「目指される私と目指される行い」によってではなく、「これまでの私とこれまでの行い」によって描き出されるものである [Noddings 1984 : 50]。ここで、「倫理的な理想」の土台となる「自然なケアリング」の記憶は、「自分の存続が成り立つ程度のケアリングに私たちは皆依存してきた」という認識も含めた「自然なケアリング」の記憶である [Noddings 1984 : 49]。自覚的なケアの関係だけではなく、私たちが生きている事実にもすでにケアリング関係が存在していること、つまり、理想的理想が先立って感情をそれに従属させるのではなく、生きているという事実も感知する感情を伴う経験のなかから、パーソナルな理想を再形成し続ける、その生成的でパーソナルな理想の構築がケアリング関係を保ち、その関係を発展させてゆくために不可欠な要素であることを彼女は指摘している。

また、以上のような二人称的なケアリング関係の記述にとどまらず、ノディングズは二者の間のケアリング関係が見知らぬ遠方の他者ともつながり得ることを、「同心円 (circles)」と「連鎖 (chains)」という概念で記述する [Noddings 1984 : 46-48]。ケアされる人という身近で親密な他者とケアの関係を築いていると、これまで親しくしていなかった他者を身近で親密な目の前の他者とのつながりで感じ始める。その際、人は関係が親密な他者から関係が希薄な他者に至るまでの、自己とケアされる人とを中心とした「同心円」的關係の系のなかで他者を位置づけるようになる、とノディングズは説明する。さらに、その「同心円」から踏み出して、未だ出会っ

たことのない他者とも「同心円」関係の内にいる他者との形式的なつながりも含めたつながりで結びつき、見知らぬ他者が潜在的なケアされる人として、現在の私の人生に入り込んでくる。彼女はこの現象をケアリングの「連鎖」と呼ぶのである⁷⁾。

以上のように概観できるノディングズのケアの倫理は、発表された1984年から現在まで、倫理学、教育学、医学、政治哲学等、欧米を中心に様々な領域で受容され議論を巻き起こしている⁸⁾。その特徴も「応答性」や「間主観性」等いくつかの概念で整理されている中、特に彼女のケアの倫理を特徴づける「非対称性 (asymmetry)」概念について、次に詳しく見てみたい。

Ⅲ ノディングズのケアの倫理における「非対称性」

1. 非対称的にふれあう関係

ケアリング関係は、ケアする人とケアされる人が「同等ではなくふれあっている」非対称関係である。ノディングズは、この非対称的なケアする人とケアされる人双方の関係の倫理を描くことで、従来の倫理観が前提としていたもの、つまり、人はそれぞれ自律した存在であり、人と人は対称的に関わるという前提を根底から問い直すことを試みた。

ノディングズは、ケアの倫理の「最も優れた貢献は、ケアされる人との関係と、ケアされる人の役割を強調していることであろう」と述べる [Noddings 1984 : 180]。これは多くの伝統的な倫理学に拒否されてきた特徴であり、ケアの倫理が、ケアすることがケアする人の態度や意図に完全に依存している訳ではないことを示すものであるという。

前節で、ケアリング関係はケアする人の「専心没頭」「動機づけの転移」とケアされる人の「認知」「応答」を必要とすることに触れたが、より具体的には、まず、ケアする人がケアされる人を受け容れ、「専心没頭」し、その際のケアする人の在り方として、ケアされる人への「動機づけの転移」がなされ、そして、ケアされる人はケアする人のケアリングを「認知」し、それを受け容れ、「応答」することでケアリング関係が生成することを意味している。つまり、ケアリング関係にケアする人とケアされる人は非対称的な立場で臨んでいるということである。それは、ケアされる人にケアする人の「動機づけの転

移」が要求されないことにも現れている。個々人の間の対称的な関わりを前提としている従来の倫理観とは、この非対称的にふれあう関係においてケアの倫理は一線を画しているということができる。

こうした非対称的にふれあう関係において、ケアする人とケアされる人は互恵的に受容し、応答し合うという。では、ノディングズが描くその「互恵性」とはどのようなものであろうか。

2. ケアの関係の生成における非対称的互恵性

多くの場合、「互恵性」という言葉は対称的な関係の枠組みにおいて理解されているため、例えば、妻が夫をケアするように夫も妻をケアするといった文脈で解釈されがちである。しかし、ノディングズが描こうとしたケアの倫理における互恵性の概念は、ケアしケアされるというケアリング関係の生成に必要な不可欠な非対称的互恵性である。つまり、ケアリング関係が成立するためには、ケアする人は十全にケアし、ケアされる人は十全にケアされる必要がある、ということである。

その意味を、ノディングズがケアされる人の互恵性の一つとして挙げる「倫理的ヒロイズム (ethical heroism)」の考察を通して、見てみたい。

ケアされる人はケアする人のケアリングが感じられている時は、自然にそれを認知し受容し応答するという「自然な応答性 (natural responsiveness)」の立場をとる。しかし、ケアする人のケアリングが感じられない時、ケアされる人は「自然な応答性」から「倫理的な応答責任 (ethical responsibility)」の立場に移行する場合があるとノディングズは述べる。つまり、ケアする人のケアリングがケアされる人に感じられない時でも、ケアされる人としてケアリング関係に貢献する行為を敢えてとるということである。それをノディングズはケアされる人の「倫理的ヒロイズム」と呼び、その行為によって、ケアされる人が、ケアすることもケアされることも学ぼう可能性があるとして述べる [Noddings 1984 : 78]。

この「倫理的ヒロイズム」は、その性質上、ケアされる人に多くを要求するように見えるが、ノディングズは次のように意図している [Noddings 1984 : 74-78]。

ケアする人のケアが感じられない時、すなわち、自然なケアリングが感じられない時、それはケアする人がケアされる人に自己投影をしているからかも

しれない。その時、ケアされる人はケアする人が自己投影のままでいないような、何かの応答をすることがある。あるいは、自然なケアリングが感じられないのは、ケアする人が自分に何もしてくれないからかもしれない。その時でも、ケアされる人はケアする人を待ち望み、呼びかけることがある。そうしたケアされる人の応答がケアする人を受容に向かわせ、ケアリング関係の生成や維持を促すことがある。ノディングズは、それを「倫理的ヒロイズム」と呼ぶのである。それはケアされる人に多くを望む倫理というより、むしろ、ケアされる人の尊厳を見出す倫理と言える。ケアされる人はケアされるばかりで何もできないのではなく、ケアされるという非対称的な仕方でもケアリング関係に貢献し、ケアする人と共にケアリング関係を築く。ケアされる人の積極的受動による互惠性に「倫理的ヒロイズム」を見出しているのである。

以上のようなノディングズのケアの倫理における非対称性の議論には、次の二つの次元が存在する。すなわち、①ケアリング関係はケアする人とケアされる人が非対称的にふれあっている、という次元と、②ケアリング関係の生成にはケアするモードとケアされるモードをそれぞれが十全にとる必要がある、という次元である。

次節では、このノディングズの非対称性の②の次元に着目することで、倫理学の領域を超えてコミュニケーション観の捉え直しを図った P. シュバイカートの研究を参照し、コミュニケーション行為における「聴くこと」の意義を捉えたい。

IV シュバイカートによる コミュニケーション行為の非対称的捉え直し

シュバイカートは、ノディングズのケアの倫理の非対称性に関する議論を援用することを通して、J. ハーバーマスのコミュニケーション行為論における「話し手と話し手の合意形成」としての対称的コミュニケーション観とは異なる、「話し手と非対称的な聴き手との間の関係の成立」という新たなコミュニケーション観を主張した [Schweickart 1996]。

彼女は、「議論することに対する過大評価は、コミュニケーション行為=話すこと (speech) と見なすことから始まっている」と指摘する [Schweickart 1996 : 317]。コミュニケーション行為と話すこと

を同一視するハーバーマスに代表される理論は、人が他者に話をする際に典型的に評価される特質、すなわち「意見を形成し考えを話すことができること、自由に話すという他者の権利を尊重すること、他者の見解とフェアに取り組むことができること、そして、その人『個人』というよりその人の『主張』に注意が向けられている限り『個人的に』攻撃しないこと」等の特質をもっているという [Schweickart 1996 : 317]。こうしたハーバーマスの「理想的な発話状態」、つまり、すべての対話者に自由に話す権利を相互に分配し、話す機会を平等に配分することに見られる議論の倫理は、明らかに L. コールバーグの道徳性の発達理論に見られるような正義の倫理と一致していると述べ、この点に疑問を投げかける。確かにコミュニケーション行為は話す役割に吸収されやすく、アイデンティティーを確立することは「声」をもつ行為主体になることだと考えられやすい。しかし、二者の話し手の間のこととして、言説的な間主観性を表すのは大きな間違いなのではないか、と [Schweickart 1996 : 317]。

コミュニケーション行為は、まず二者の話し手の間で起こるのではなく、一人の話し手と一人の聴き手の間で起こることである。単純に同一化し得ない異なる主観性のモードを用いている、異なる主体の間でのみ、間主観性は生じ得るのである。 [Schweickart 1996 : 317]

ハーバーマスのモデルは話す役割をフェアに交代することを規定しているが、それは同時に、黙するポジションにフェアに交代することも意味しており、すなわち、ハーバーマスの理論では聴き手は「最小限の半話者」の役割に減じられている。そして、「『話す』というアサーティブな行為主体を過大評価することは、『聴く』という受容的な行為主体を過小評価すること」を意味している、と述べる [Schweickart 1996 : 317]。

しかし、「聴き手の沈黙は何もせず何も生み出していないということの意味しているのではなく、聴き手も活動的に相手の発話の意味を生成することに携わっていると彼女は主張する。「一般論では、コミュニケーション能力は話し手に付随させられているが、実際は、話し手のプロジェクトの完了は解釈する聴き手の主体に依存し、左右されている」の

である [Schweickart 1996 : 318-319]。

話すことと話すことという平等に必要なモードではなく、二つの単純に同一化し得ない異なるコミュニケーション行為のモード、すなわち、聴くことと話すことが存在するという認識すること。そのことによって、「ハーバーマスに反して、ディスコースは話し手の交替だけではなく、話すことと聴くことの交替、つまり、私が話しあなたが聴き、あなたが話し私が聴くことを伴っているのだと理解することができる」のである [Schweickart 1996 : 319]。

さらに「聴き手と相手のスピーチの関係を理解するために、二つの単純に同一化し得ない異なる役割における、主体間相互作用の非対称的なモデルを必要とする」とシュバイカートは述べ、そのモデルを析出する際に、ノディングズのケアの倫理の非対称性概念を援用し、聴き手の受容的な行為主体が構造的にケアする人の特性に類似していることに注目する。

ケアする人のように、聴き手は対話者の発話をケアしなければならない。話し手を理解するために、受容的な注意力や「専心没頭」で話されていることの方に手を差し出さなければならないし、自分の主体的な力の一部を相手の意味を生成するというプロジェクトに与える「動機づけの転移」を引き受けなければならない。一方、ケアされる人のように、話し手は解釈する聴き手の行為主体に依存し、左右される立場にある。敵意がありケアしない聴き手や自己中心的で利己的な聴き手は、話し手のコミュニケーションでめがけているものを打ち負かしてしまうだろう。[Schweickart 1996 : 319-320]

シュバイカートは、前節で指摘したノディングズのケアの倫理の非対称性における②の次元に関する議論、つまり、ケアリング関係の成立にはケアするモードとケアされるモードをそれぞれが十全にとる必要があるという議論を参照し、さらに主張を展開する。

彼女によると、ノディングズのケアの倫理におけるケアする人の役割はケアされる人の役割とは異なり、お互い道徳的な受容性は必要とされるが、それは「与えられ、受けとられる贈り物と同義の言葉」で捉えることはできないという。「ケアリングはケ

アする人からケアされる人へ流れ出て」おり、「道徳的な受容性は、与えられたケアの期間で、その流れの逆転を要求してはいない」のであり、「ケアされる人は、ケアが与えられていることを認め、受け容れ、自身のめがけているものへ前進するためにその力を用い、ケアする人と、自分の生や活動を自由にシェアしなければならない」のである。つまり、「ケアされる人は、ケアする人の役割をとって新しいケアのサイクルを始める前に、現在のサイクルを完成させるために、ケアされる人としてまず応答しなければならない」のである [Schweickart 1996 : 320-321]。ケアリング関係と同様、コミュニケーションが成立するか否かは、話し手と聴き手のそれぞれが自分の役割を十分に全うすることにかかっているという。

話し手は話し、聴き手は聴く。あなたはあなた自身のことを話すことによって、私が話すことに応答する必要はない。まず、(私が話している間)、あなたは聴かなければならない。そして、私もあなたが聴いていることが分かるやいなや、聴き手の役割をとるために私のスピーチを中断する必要もない。私は、聴いているというあなたの贈り物を受け容れ、私のスピーチを完成させるために、あなたの私への注意力を用いなければならない。それから、私はあなたが私に耳を傾けたのと同様の注意深さで、あなたに耳を傾けるという私の責務を果たすことができるのである。[Schweickart 1996 : 320]

以上のように、シュバイカートは、コミュニケーション行為は話し手と話し手の役割の交替ではなく、話し手と聴き手という非対称的な異なる主体の交替ということ、さらに、コミュニケーションの成立には話すことに見られる「アサーティブなモード」と聴くことに見られる「ケアフルな受容的モード」双方が必要だということを提起した [Schweickart 1996 : 321]。

V おわりに

本稿では、子どもたちの生活指導におけるケアと相互依存の関係性構築のための具体について示唆を得るべく、ノディングズのケアの倫理の非対称性概

念からコミュニケーション行為における「聴くこと」の意義を析出した論考をここまで辿ってきた。ケアリング関係を築くこととコミュニケーション行為の成立の関連を「聴くこと」を軸に見出すことができたが、以下、上記を経て示唆される学校での生活指導について、3点でまとめたい。

まずは、コミュニケーションにおいて聴くことがもつ積極的な意味を認識することである。シュバイカートが主張しようとしたのは、一般的に話し手と話し手の交替として意識されるコミュニケーション行為は、実はアサーティブな話すこととケアフルで受容的な聴くことという非対称的な異なるモードの主体の交替だということであり、そのコミュニケーションの成立には、聴き手が話されている内容に「専心没頭」し、話し手の意味の生成に聴き手自身の主体的なエネルギーの一部を注ぐ「動機づけの転移」が行われているかが大きく影響を及ぼしているということである。この聴くことの活動的で積極的な能動性を学校教育においても理解することが重要であろう。

その上で、次に、学校での生活指導の主たる場である学級活動を中心とした特別活動領域で、子どもたちの聴き合う関係づくりを中心に指導を行うことである。従来の学習指導要領と同様、平成29年3月に示された次期学習指導要領においても、子どもたちの「話し合い活動」が推奨されているが、「話し合い活動」というより「聴き合い活動」を促すことが、本来の意味で、他者との応答的な対話が成立する「話し合い」になると考える。筆者がこれまで訪れた、子どもたちが他者の声に注意深く耳を傾ける応答的な教室では、子どもたちの聴き合い、応答し合う関係を具体的に編み直していくための教師の働きかけが様々になされていた。聴くということはただ静かにしていることだけではなく、「今の〇〇君の言葉、どうですか。いいなと思ったらいいですって言ってもいいし、拍手してもいい、うんってうなずいてあげるだけでもいいです。分からないなって思ったら、もう一回教えてって言ってもいいよね」と、応答をすることまでを含めて聴くことだということを繰り返し様々な場面で具体的に伝えることで、一つ一つ手ほどきをするように聴くことの意味を教室に浸透させていた。聴くことだけではなく話すことにおいても、「その言葉は誰に向かって言ってるの」、「じゃあ、〇〇ちゃんに体と気持ちを向けて言っ

てごらん」と、聴かれ応答されることを求める話し方、話す態度を伝えていく。こうした指導を、学校でのあらゆる生活指導の場面、なかでも、他者との集団での活動が目指される特別活動において実施していくことが、子どもたちのケアと応答の相互依存関係を構築していくことにつながっていく。

最後に、そうした生活指導における聴き合う関係づくりが、授業を対話的で応答的な学びの場にするためにも必要とされることを指摘したい。子どもたちが夢中になって学び合う授業づくり、学級づくりの実践を報告している古屋教諭は、授業で対話的に学び合うための学習習慣として、聴くこと、聴き合うことを第一に挙げ、学校生活のあらゆる機会に聴くことの意味や聴き方を子どもたちに伝える必要があると述べる [古屋 2014]。また、一柳は、授業の場で異なる意見の交流が生まれ、学びが深まる学級では、子どもたちがお互いの言葉を聴き合っていることを指摘し、聴き合いながら学ぶのを支援するための教室空間の構成や日々の教師の言葉かけ、教師の立ち位置等を説明している [一柳 2010]。学校や学級での生活指導場面でのケア的な聴き合う関係づくりが、子どもたちの対話的で深い学びにも必要不可欠の要素として報告されている。

以上、子どもたちのケアと相互依存の関係を学級や学校において構築していくための一つの大きな要素として、聴くことの積極的な能動性を認識し、生活指導場面を中心に子どもたちの聴き合う関係を築いていくことの重要性が見出された。子どもたちが必然的に聴き合うことを欲し、必要とするような活動や場を教師がいかに準備するかということについては、触れることができなかった。他稿で改めて明らかにしたい。

註

- 1) 本稿では、戦後初期以降、学校における子どもたちの「仲間づくり」から「学級集団づくり」へと理論的、実践的研究を展開してきた生活指導研究を踏まえて、「生活指導」という用語を使用する。生活指導研究において「生活指導」とは、新しい社会や文化を創造する主体形成を目指した、学校での子どもたちの生き方の指導や人間関係づくり、学級集団づくりを指す [船橋 2009, 西岡 2017, etc.]。

- 2) 竹内も生活指導における「ケア的なアプローチ」について言及する際に、ケアの倫理についてふれている [竹内 2015: 83-92]。
- 3) ここでの「道徳的推論」は、C. ギリガンによって批判的検討を加えられたL. コールバーグの道徳性発達理論を指す。
- 4) 「ケア」と「ケアリング」という語は学術的には明確に定義されていない。例えば、J. ワトソンは看護においては「ケア」は行為で「ケアリング」はその基盤をなす態度や心を指すと述べ、M. レイニンガーは「ケア」は現象で「ケアリング」は行為と捉えていることを操は指摘している [操 1996: 217]。
- 5) ケアに関する議論は主にフェミニズムの文脈で語られている。ここで簡単に現代のフェミニズムの流れを整理してみたい。現代のフェミニズムには様々な立場があるが、例えば、S. ヘックマンは従来の「男性 (=人間)」中心的世界観に対するスタンスのとり方によって、それを次の三つに分類している。すなわち、①近代の自由主義思想に基づいて、女性が男性と同等に社会の諸領域に参加すべきだと主張するリベラルフェミニズムを含む「モダニズム」の立場、②これまで階級的二項対立の劣位におかれてきた女性原理を男性原理と同等か、もしくは優位におこうとするラディカル・フェミニズムを含む「アンチモダニズム」の立場、③男性/女性という二項対立そのものを疑問視するポストモダン・フェミニズムを含む「ポストモダニズム」の立場。ヘックマンによると、1982年にケアの倫理を道徳性発達心理学の文脈で提起したC. ギリガンは、この分類のどこにもあてはまらない、②と③の間に属しているとされる。ノディングズについては直接言及していないが、ギリガンと同じ流れを汲むと考えると、ノディングズも②と③の間ではないかと考えられる [Hekman 1990]。
- 6) 1960年代から70年代にかけて、ケアリングを一般的な人間学の主題として提示した哲学者M. メイヤロフの「献身 (devotion)」と「ケアされる人の成長の促進」が、ノディングズの「専心没頭」と「動機づけの転移」に対応している [Mayerroff 1971]。
- 7) ノディングズは自身が提起したケアの倫理に基づいて、ケアリングを中心にした学校改革の構想

をその後の著作で発表している。現在のリベラル・アーツ中心の学校教育を批判し、ケアを中心に据えた次のような六領域のテーマで構成した学校教育カリキュラムを提示する。すなわち、「自己へのケア」「親しい者へのケア」「見知らぬ人や遠く離れた他者へのケア」「植物・動物・自然環境へのケア」「人工世界へのケア」「さまざまな観念へのケア」である。ノディングズはこれらのテーマからなるケアの教育に基づいた学校教育の実践方法として「モデリング」「対話」「実践」「信念の表明」の4つを挙げている [Noddings 1992]。

8) なかでも、近年フランスで発表されたF. ブルジュールの一連の著作は、アメリカで始まったギリガンやノディングズのケアの倫理をヨーロッパの哲学的背景から深め、現代のネオリベラリズム社会におけるケアの倫理の必要性和革新性を提起する論考として注目に値する [Brugère 2011, 2013]。

文献

- [Brugère 2011] Brugère, F. 2011. *L'éthique du care*. Presses Universitaires de France. / (2014) 『ケアの倫理-ネオリベラリズムへの反論』原山哲他訳, 白水社。
- [Brugère 2013] Brugère, F. 2013. *La politique de l'individu*. Seuil. / (2016) 『ケアの社会-個人を支える政治』原山哲他訳, 風間書房。
- [Hekman 1990] Hekman, S. 1990. *Gender and knowledge: Elements of a postmodern feminism*. Polity Press. / (1995) 『ジェンダーと知: ポストモダン・フェミニズムの要素』金井淑子他訳, 大村書店。
- [船橋 2009] 船橋一男 (2009) 「生活指導」『教育学をつかむ』木村元他編著, 有斐閣, 2009, 147-156頁。
- [古屋 2014] 古屋和久 (2014) 「学び合うための学習習慣を創り出す教室」『対話が生まれる教室-居場所感と夢中を保障する授業』秋田喜代美編著, 教育開発研究所, 58-63頁。
- [一柳 2010] 一柳智紀 (2010) 「聴き合うクラスを育てる教師と学習環境」『教師の言葉とコミュニケーション-教室の言葉から授業の質を高めるために-』秋田喜代美編著, 教育開発研究所, 26-31頁。

- [Mayerroff 1971] Mayerroff, M. 1971. *On caring*. Harper & Row. / (1987) 『ケアの本質-生きる
ことの意味-』 田村真他訳, ゆみる出版。
- [西岡 2017] 西岡加名恵編著 (2017) 『特別活動と
生活指導』 協同出版。
- [Noddings 1984] Noddings, N. 1984. *Caring: A
feminine approach to ethics & moral Education*.
University of California Press. / (1997) 『ケア
リング-倫理と道徳の教育: 女性の観点から-』 立
山善康他訳, 晃洋書房。
- [Noddings 1992] Noddings, N. 1992. *The chal-
lenge to care in schools: An alternative approach
to education*. Teachers College Press.
- [Noddings 1995] Noddings, N. 1995. Care and
moral education. In W. Kohli (Ed.), *Critical
conversations in philosophy education*, Routledge,
pp. 137-148.
- [佐藤 1995] 佐藤学(1995) 『学び その死と再生』
太郎次郎社。
- [Schweickart 1996] Schweickart, P. P. 1996.
Speech is silver, silence is gold: The asymmet-
rical intersubjectivity of communicative ac-
tion. In N. Goldberger, J. Tarule, B. Clinchy, M.
Belenky (Eds.), *Knowledge, difference, and
power*, Basic Books, pp. 305-331.
- [志水 2014] 志水宏吉 (2014) 『「つながり格差」
が学力格差を生む』 亜紀書房。
- [操 1995] 操華子 (1995) 「解説 米国におけるケ
アリング理論の探求」 『アクト・オブ・ケアリン
グ-ケアする存在としての人間-』 シスター・M・
シモーヌ・ローチ著, 鈴木智之他訳, ゆみる出版。
- [竹内 2015] 竹内常一 (2015) 「生活指導における
ケアと自治」 『生活指導とは何か』 竹内常一他編
著, 高文研, 73-108頁。

(2017年10月20日受付)

(2017年12月20日受理)